

太陽の音楽（４）

1.太陽の光の音は、地球自然界に生きる生命たちの、躍動する命の音。地球に生かされ、地球を生かす人間の、自然な地球感覚の音。そして、全ての生命たちの姿を守り続ける太陽の、永遠の変化と生命力の音。

そこに在るから、それは普通。その普通の中でどこまでも伝わり、流れるから、それは自然。そこに居れば、初めからどこにも無かった不安は消え、緊張も隔たりも経験の外側となる。人の不安や緊張が姿を消すことに不安になる存在を除いては…。

太陽の光の音は、一切の理由を不要とする喜びの、その原因の世界で響く。どこにも向かわず、何も求めず、ただ平和と健康の原因でい続けるその姿に、そっと寄り添う。その音は、人間らしく人間を生きる人の、その普通の要素。そうではなかった(そうにはなれなかった)時の経験の記憶を癒し、そうであるようやさしく誘う。

これまでの時が不自然・不調和なものであっても、ここでその音が心の芯に伝われば、それらは無いと同じ。これまでの時が自然で調和あるものであっても、この音との縁を避ける自分がいれば、つまりそういうことである。太陽の光の音は、それぞれの時の色を変えていく。

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

2.無自覚に心身を病み、不自然に感性を鈍化させた人がやたら海や山で音楽を聴こうとするように、音楽は、人の歪な普通に巧く入り込み、しつこくそれを維持させようとする。それは脳を忙しくさせて、自然を遠ざけ、感覚を思考型(人間優先)のそれにして、生命たちに緊張を強いる。人間が嬉しい音楽の殆どは、自然界の異物であり、時の違和感である。

心は、歌(曲)に乗るその背景となる原因の性質に反応する。しかし頭はそれを拒み、個の経験にフィットする心地良いメロディ(リズム)や歌詞の世界に浸るといふ、思考の満足を選ぶ。心切ない経験をした人の多くが、そのことの原因を無視し、結果からの望みを強くさせて、形ある優しさに癒される。心を取り戻し、心強く生きようとする本来を嫌がる人ほど、心無い原因の心の歌に惹かれる。

自然は、心のままの柔らかな感性を嬉しい。そんな人は、鳥たちのさえずりや鳴き声に安心を覚え、風にそよぐ草木の音に平和な想いを抱く。そこに在る、優しさの原因そのものの音。そんな風景に、音楽は遠い。自然の中の、自然な生命たちが作る音は、生命そのものの音楽である。

3.自然の中での生命たちの営みは、太陽の光の音で溢れている。生きることがその音であり、生を終える時も、生まれ出る時も、その音に抱かれる。どこに居ても、太陽からのその音を響かせて繋ぎ合い、どんな時も、その光の音の中に居る。太陽が支え、守り続けるこの地上での健康と調和の原因は、動植

験の記憶とその性質全てを白紙にし、人間生命の、数万年(数十万年)振りの再スタートを促す。

かつてからの仲間は、ただ共に居られることを喜び、永い年月での様々な人間的な関わりの時を、笑い話にする。そして、またいつものように、歩き出す。自然界の生命たちが、太陽の音楽を奏でる。太陽の光が、その音のトーンを上げる。(by 無有 8/03 2018)

物たちの日常そのものである。

自然界が嬉しい音楽があるとすれば、それは太陽の光の音と自ら(の感性)を重ねる人の作る曲であり、歌う(奏でる)歌である。そして、その実、それが唯一この時代に人間に許された音楽であり、それ以外は、音楽という形を持った不自然・不調和な原因の力と考える。自然界は、それを教え、共に生きる生命たちは、それを望む。

「太陽の音楽」は、太陽の光の音が人間を通して形になった、地球自然界の希望であり、それと自然に融合し得る人たちの心を強く元気にする、変化し続ける生命の原因の光である。人は、いつのまにか、「太陽の音楽」との縁を通して、そのことを普通とする。

4.これまで縁したことの無い(原因を備える)音楽を聴くことでの変化は、単に形ばかりの(実の無い)変化と理解する。それよりも、今居るこの自然界が嬉しいことをし、動植物たちの生きる自由を守る。そこに生命たちの哀しみがあれば、その原因を浄化し、ずっとそのままであろうとする海や山がその意思を抑えられていれば、その理由を外す。そして自然に離れて行こうとする不自然な曲(歌)を遠くに、音感を人間本来のそれにする。

太陽の音楽は、そんなところに届く。ふと気づけば、それとの出会いを引き寄せ、何気にそうである自分でいて、それを自然なこととする。自らの原因の変化・成長は、そのための大

切なプロセス。時代への責任を普通に、生命たちが嬉しい未来の原因を实践する。あれこれ考えている時間も、好みの音楽に酔っている空間も要らない。「太陽の音楽」と「人間」で、変化の原因に力を与える。

5.そして今、太陽の音楽よりも先に、太陽の光の音が、この時をずっと待ち望んでいた人たちのその心の芯に届く。そして、生命本来という人間の普通が動き出す。

「太陽の音楽」の原稿になろうとして何度もこの場所を通り抜けたその原因は、永い間脳を不自由にされて、自分らしく生きる力を無くしてしまっていた人の、その真の姿を見通せる程の時を生み出す。ずっとそれを見えなくさせていた闇と、ずっと動けなくさせていた重石を外し、本当はそうではないのに、そうなってしまっていた危うさと不確かさの理由を砕く。誰よりも縁遠かった太陽の光の音が、実は自分こそそれとの融合を欲し、それを可能とする原因が、心の中に在ったということ。その時が、ここに在る。

自然界が安心する生命としての人間の音(音楽)が押し潰されて以来、現代まで、不本意そのものの(異常とも思える)生を繰り返し生きることになる(生きさせられる)、心ある普通の人たち。「太陽の音楽」は、彼らの心の芯をたぐり寄せせる。そして、時代との約束通り、生命世界の希望になる。

6.繰り返し何度でも、太陽の光の音との融合を重ね、自らの

経験を通して、ここに繋がる次なる時の(未来の)風景を確実に変える。音の風景は、調和と責任をあたり前とする(その原因からの)音楽を生み出し、風となり、水となって、続く未来へと流れて行く。そして永い眠りから醒めるようにして、その存在は動き出す。この時の訪れを機に、遙か昔のあの時(土器を作り出した頃)のように、知恵の光の音を起こす。

動きの無い音(音楽)を利用して人々の生きる自由を奪ってきた存在たちが、この地上で初めて人間時間を経験し出した時、彼らは、どんな手を使っても永遠にその力を押さえ込むべき、地球(の意思)そのもののような生命の意思を備える人間に出会う。彼らのその至上課題となる力により、尽く潰され、操られ、辛さと苦しさしか知らない人生を連ねることになる、その存在。彼(彼女)は、太陽の光の音を増幅・拡大させ得る力を内に持つ。その時は、「太陽の音楽」の切なる望みである。

8.「歴史の芯」などで、歴史的事実の、その背景となる原因の姿を知り得たら、そこから離れ、これまでの知識と理解全てから自由になる。そして、負の原因としては限り無く意味不明となる音(音楽)の世界の、その姿無き本質(正体)の力とさりげなく向き合う。それを可能とする生き方は、人生の最重要テーマであり、淡々とそうであることが、真に生きることである。

そして、これまでが、そのまま未来に繋がる今を通り抜けるか、そうではないかという、時代の意思への呼応(責任)がここで試される。その時、太陽の光の音は、かつての人間経

ない人たちの思考の質(力)まで変化に乗せ、自らの心の芯を、未来の自分と繋ぐ。それに連れ添う音楽も元気になる。

6.人間の脳は、記憶の中の音楽のその原因が変わることで、生まれ変わるような喜びと変化の時を経験する。そして、余裕を手にしたその中心(核)の意思は、かつての生で脳に染み込ませた音(音楽)の、その原因関わりのあるいくつかの経験の記憶(の原因の性質)をここに引き寄せ、それらを浄化する。

それを為し得ることで、周りはそれに連動するようにして動き、そして初めて、未来が真に変わる原因のその普通の時を実感する。音楽を通してのその変化は、「太陽の音楽」の神髄である。

太陽の光の音は、この今も、それとの融合を普通とする人の脳の、その中枢(の次元)の生命の意思に届く。変化の、その本来の働きかけである形無き原因の動きは、そのことで次第に活動的になり、何もせずに何かが変わり得る流れを生み出す生命本来の力も、余裕を取り戻す。

遙か遠い昔の音の風景も、この時を喜び、安心してそこに居てくれる。いつでも遊びに行ける場所として、太陽の光がこの今との間を繋ぎ、共に、未来を訪れる。その未来も、この時の音の風景に安心する。

7.永い時の、そこでの全てのことがまるでどこにも無かったかのように、新たな原因の高まりは、次々と創られる普通感覚の

中の真に、その想いを存分に具現化させる。何はともあれ、今はその時。この今の生命の機会(チャンス)を十分に活かし、心を輝かせる。

感度を停滞させる嘘の音楽と、それに支えられた歪な普通世界のその意図は、心ある風景へと動き出す自然な変化を尽く遮ること。そのために被ったかつてのいくつもの辛く厳しい時を心は知るから、出来ることを、好きなように、好きなだけ行う。それを喜ぶ太陽は、元気さを増し、その光の音も、それまでの人間の知を超えた仕事を余裕で行う。太陽と共に、地球自然界に響き渡る生命の音(音楽)を奏で続ける。

いつしか(という時間幅も無いのだが…)、太陽の光の音との融合を普通とする人は、縁あるどんな人の脳も、人間本来を基に難無く変化に乗せてしまう。そこに在る違和感の原因が自動的に処理されることで、次へと動き出す人、変化を拒み留まる人と反応は様々であるが、自然界にとって嬉しいその原因の連なりは、さらりと生み出されていく。

7.人間の脳の中には、生きることの質を変化・成長させようとする、一生命としての意思が備わっている。そうであろうとする動きを力で封じ込めることの出来たかつての時とは時代背景が大きく異なる現代、ここでは、音楽がそのために利用される。つまり、この時代、人は、その音楽の形無き影響力を処理する「太陽の音楽」を通して、初めて脳が変わり得る経験をするということ。音楽の負の原因を外すというのは、人間にとつ

て、この上ない責任と希望の実践となる。

もちろんその準備段階として「歴史の芯」と「仏陀の心」があり、力強い生き直しの機会として「人間」がある。そしてこの「太陽の音楽」の時、反応はどんなであれ、それを機に、人は自らの生命の本質(意思)を知り得、ここに居るからこそその然るべき変化の時を経験する。そこに善悪や正否といった人間世界特有の未熟な価値概念は無い。あらゆる宗教観も人間観(世界観)も通用しない。人間が人間でいる時、その原因の変化・成長の姿はどんなであるか…。それだけである。そして、その違いの全てを無有日記は包み込む。

8. 太陽は、この地球の生みの親であり、そこで生きる生命たちの姿を、彼は愛しさと無限の優しさで支え続ける。太陽の光は、人間も含めた全ての生命たちの生きる力。それは、生命力の源泉。自然界の一部として生きるそれぞれの分の基礎はそこに在り、脳の中樞は、その光の多次元的な要素を以て、健全に体の活動を運ぶ。太陽の光は、地球自然界の生の根源である。

太陽の光の音は、全ての生き物の生命本来という形無き生の中心に流れ、音無き音として、生命活動のその意思の原因に響く。人間は、彼らと繋がる心の芯にその音を通し、遙か昔から育む原始脳とも言われる(生の基本である)部分のその原因にそれを響かせる。太陽の光の音は、太陽の意思と繋がる証であり、生命たち皆が経験する、全てであるひとつの共

ることになる。

(変化の原因を備えない存在たちが生み出した、蛇が地を這うような曲調や、雷雲の怒り、亡者の恨みなどを模した音(音色)は、心ある人の脳の中で、重量級の重石となる)

5. そこに潜む停滞の原因が音楽という形を通して世に流れることで、人の脳の働きが、そうであることも分からずに容易に病まされることになる、古風で古式に則る、昔からの動きの無い音と曲。太陽の音楽は、この地上で人間が人間らしく生きるために、その停滞の原因の蓄積を、ムリなく処理し、浄化していく。そうでなければ、この時は無い。悲しみと諦めの連鎖ほど、人として切ないものはない。

太陽の光の音は、ある意味、負の原因の働きかけの逆噴射のような状態を生み出し、それを遊ぶ。重く、流れない停滞を心地良さと感じる存在たちのその脳は、太陽の自然な姿(力)を嫌悪するという非生命的な負の共通項を持つゆえ、彼らが好むそれ系の音楽のその形無き意思の土台に、その音を流し込む。

そのことを遊び心一杯に自由自在に行うのが、「太陽の音楽」で本来を取り戻した人の、その脳である。その中心(のある部分)を通して脳全体を元気にしようとする、変化し続ける生命の意思の力は、ただそのままいて、これまで誰も変えられなかった歪な風景のその原因を、普通で、自然なものにする。太陽の光の音との時を心待ちしていた人たちは、そうでは

っ黒な感情である。

その存在たちは、自分たちが好き放題出来る状況を安定させるためには、素朴で柔らかな感性を持つ人たちのその脳を尽く不自由にさせることであると考へ、彼らの脳を中心(核)から外へと流れ出すその人間本来の原因の動きを完全に押さえ込む手段を講じる。そのための道具が音(音楽)である。

4.動きの無い原因からなる音楽(音)は、そのままそれに停滞と収縮(鈍麻と自壊)の意思が乗り、脳にその音が記憶されることで、そこに在る原因は、脳の働き全般に負の影響を及ぼす。その類(次元)の音楽が繰り返し耳に入ると、脳の深くまでそれは染み入り、人としての感覚的理解の力や自由意思は削がれていく。次第に脳は、その中心から健康・健全の原因を生み出すことが出来なくなり、その人の人生は、人間本来からかけ離れてしまうことになる。

他者の変化を止める動きの無い原因の音楽には、その負の要素として、犠牲を強いられた敏感な動物たちの、その地には還れない辛さ(皮膚、骨)が様々に利用され、そのことに感応する(悲嘆する)普通の人たちの自分たちへの恐怖心を煽るためのものとして、それは(その音は)、服従と忍耐を絶対とする力の象徴へとその姿(音調、音色)を変えていく。人の悲しみや苦しみの場で、重く流れない音楽を奏でる(音を出す)ことで、それは執拗に人の脳に居座ることになり、心無い存在たちは、思い通りに事を動かし、難なく人の人生を支配す

有である。

そして太陽の音楽。それは、この現代では、その太陽の光の音との融合体験を呼び醒ます、太陽の望みを乗せた生命の音楽である。

太陽の光とその音。そして太陽の音楽。人は、今の世でも、かつての時と同じように、何も無くても必要なもの全てが有り、何が有ってもそのどれもが全てであるひとつと繋がる、そのまままで平和で健康の時を経験する。それは、ここに流れる、太陽の光の音の意思。「太陽の音楽」は、その音を増幅させ、その心ある風景の原因を力強いものにする。好きなだけ、人間を生きる。太陽も、好きなだけ太陽を生きている。(by 無有 6/29 2018)

太陽の音楽（5）

1. 生命のリズムを押さえ込むような、重く流れない音楽の存在。この地上に在ってはならないそれは、その原因に、非人間性からなる悪辣な感情を潜める。哀しいかな、それは、この国の歴史的遺産として存在感を持ち続ける。

心身が普通自然体のそれであれば、細胞は、音楽の性質に正直に反応する。そうではない時、それは、反応しないという反応を以て、異常な状態を普通とする。人の世ではそれはあり得ないことなのだが、永い年月での（不穏な音の）染み込み作業により、人のその状態は安定・維持される。そこに、生かし生かされる生命の姿は無い。

音楽は、育み続ける感性がそれとの時空を演出し、様々な感覚を自然に動かしつつ、形無き変化の原因の融合とその高まりを経験するもの。それは、どんなもの（曲）でも、思考（左脳）で触れるものではなく、どんな状況であっても、作為的な静寂や躍動（高揚）が不自然に生み出されるものでもない。

音楽の普通は、変化の原因が、力強くしなやかにそこで息づいていること。その普通が打ち消されたまま受け継がれる妙な音楽により、心ある人の感性は、人間（本来）のそれではなくなってしまう。

2. 「太陽の音楽」から流れる太陽の光の音を心に馴染ませた

特有のそこに在る非生命的な意思であり、姿形は同じでも、そこに至る原因が普通ではない（次元の）その働きかけで、人の心は力無いものになる。

空は、黒く厚い雲で覆われ、地上は、どんよりと重苦しくべとつとした（じめつとした）様を日常としていく。流れにくいこと、動かしにくいことが増えるようになり、それまで経験したことの無い負荷を心身に染み込ませつつ、その意識もなくそれを受容し、人は生きる。

人間の身体表現の質によって大きく影響を受ける自然界は、心ある普通の人たちの脳が本来の力を無くしたことで、その後、永い間、人間の思考の内実同様、不自然なものになる。それは、太陽が、地上の生き物たちの生に、きめ細かく付き合えなくなるということ。それ程のことを、人間本来を受け付けない存在たちは行ってしまう。

3. 心ある風景を忌み嫌う存在たちの脳は、その中心となる形無き原因（次元）のところに、動きの無い停滞の意思を潜める。そして、脳全体にその性質を元とする流れを生み出し、思考も、言動も、変化とは無縁の状況を作り出すためのそれとする。

その本性と相容れない性質と出会せば、彼らは、争い事や衝突を利用し、苦しみや痛みの経験を記憶に残させて、事の動きを止める。健全な違和感を持つ人の生きる自由（命）を奪うことは、その脳の普通である。太陽の光を尽く阻むその脳の中樞（となる原因の意思）は、手段を選ばず他を支配する、真

太陽の音楽（6）

1. 脳には、脳の全てが形づくられる(時の)その原因となる形無き創造の意思がその中心には在り、人間経験の質の変化・成長において、それはとても重要な役を担う。その意思は、その中心(核)から全方向へと絶えず流れる動きを取り、脳全体の隅々にまでそれが行き渡る状態を安定させつつ、脳内の活動のバランスを保ち続ける。つまり、脳の形無き核となるその原因の性質が人間本来のそれであれば、人は病むことも、争いや衝突を生み出すことも無いということである。

元来、人間の脳は、その意思が一切の不自然な原因を知らないため、当然病気や争い事は経験の外側で、仮に何かの要因でそのような状況になったとしても、そうではない普通によってそうとも分からず処理されて、居場所を無くす。その普通は、太陽の光との融合、そして自然界の調和との繋がり。人としての人間の生は、脳のある部分(次元)から湧き出るようにして広がり出すその意思により、常に人間本来の原因でい続ける。

2. その人間本来が違和感となるような生を普通とする存在が、この地上で同じように人間時間を経験するようになった頃から、人々の生活環境は少しずつ揺れ動き、不穏な空気感を帯びる(「歴史の芯」)。その背景に在るのが、彼らの脳(の原因)

人の、それまでには無かった内なる(脳の)変化により、その音楽とは言えない危うい音楽の負の土台が揺れ動く。そして次々と亀裂を生じさせ、崩れ出し、ずっと永いことそうにはなれなかった人間らしさのその感性を取り戻す。それも、自然に、あるがままに…。

いつの時も、心ある想いを押し潰され、生きる自由を奪われた普通の人たちのその背景には、細胞が辛くなる音(音楽)を巧妙に生み出す非道な存在たちのその脳がある。彼らの脳は、蛇絡みの本性を基本とする程の時を経ているため、活発に働かせているのは生きるための基本(核)となる部分だけで、人間が調和と友愛をテーマに成長・進化させてきているそれ以外の脳(大脳 etc.)は、付け添えのようなものとして扱う。時代背景が異なれば平気で人の命(人生)を奪える性分もそのため、人としての心ある知恵も、原因の世界への理解も、彼らには無い。短絡的で、単純で、個人を優先させるのも、脳全体の方向性が変化とは無縁であるからである。

そこから生み出された音楽は、当然動きは無く、人の変化を止める。それに乗った原因は、生きにくさへの受容を促し、世を暗く、不穏なものにする。「太陽の音楽」はその中に入っていく。

3. これまでの理解が一切通用しない変化を通して、人は、永い歴史においてどれ程の負の影響を音楽によって被ってきたかを知る。そしてその変化が、停滞と不自由さの象徴であるよ

うなその(異様な)音楽に馴れ親しんだ(馴れ親しまされた)人の脳に、何もせずに新たな動きを生じさせてしまうことも。

それは、蛇の本性とキレイに同調する部分を脳(の中心)に備える人のその負の威力によって、どうにもならない病みの融合を繰り返し重ねてしまった(重ねさせられてしまった)、人として基本となる脳内の中心(核)の個所が、太陽の光の音によって浄化され、以前より元気になったから。その微妙で、自覚もしにくい脳の変化は、思いがけない心身の変化を次々と生じさせ、そしていくつものあり得ない周りの変化を普通のこととして創り出していく。誰もその波及を阻むことは出来ない。

それもこれも、永いこと人間の知の世界には無かつただけの真の普通が、その本来をあたり前に表現しただけ。人間の脳の中枢の部分の滞りからの解放は、重苦しくじめじめとした世界を良しとする人の脳の、同じその中枢を変えてしまう。それは、普通で、自然なこと。ただ異常な状態が、そのままではいられなくなっただけ。

4.「太陽の音楽」は、原因の嘘を面白いくらいに外していく。それだけ太陽の光の音との融合は、心強く、頼もしい力になる。理由も理屈も何も要らず、思考の働きも寄せ付けない、これまでの経験枠の次元を超えた、新たな普通体験。元居た場所に帰るようなそれは、ここに至る無くてもいいはずの経験の記憶(の原因)を深くから浄化する。

質を伴いながら変化し続ける脳の仕事は、可能性を次第に

に変わることは何も無い、という理解を普通に、変化し続ける自分に真に連れ添える音楽を応援する。太陽の音楽は、変化とは無縁の音楽の世界とは無縁の、ごく普通の変化の音楽であるから。(by 無有 7/15 2018)

の病みの原因深くにまで響き出す。心ある人たちのその生きる原因の変化は、その道を照らし、新しい未来を引き寄せる。

8. 太陽の音楽の世界が、大切な分身のようにして内なる世界で自由に仕事をするようになると、当然と言えば当然なのだが、「人間らしさって、このこと?」と思えるぐらい、今までどうにもそうにはなれなかったことにさらりと出会すようになる。そして、どんな人が、どんな性質の原因を曲(歌)に乗せて演奏し歌っているかという、音楽の本質への観察を普通とし、ただそこに居るだけで(関わりを持つだけで)災いとなるような特殊世界が音楽には存在することも、体験的に知る。

心身がその意識もなく本来の動きになれば、音楽との関わりそのものが変わる。音楽によって何かが変わるのではなく、記憶の中の音楽が変わることで、周りの風景がそれに呼応するようにして変わり出す、真の普通。人は、音楽が無くてもいられる暮らしの中で、内なる変化とその影響という、とても大切な経験を創る。

そして、そんな時に出会す、記憶(過去)に留まらず変化し続ける何でもない音楽を通して、いつのまにか音楽が音楽ではなくなり、そこに在る原因(次元)の性質との要・不要の融合体験を遊び心で行う自分が居る。連れ添う音楽、身を引く音楽、そして次なる時を待つ音楽。それは様々である。

音楽は無くてもいいもの、と捉え、有ってもいい音楽となる存在の、その原因の変化に付き合ってみる。音楽によって真

更新し、自動制御のようにして時を癒していく。もちろんそれは、自然界に生きる一生命としてのその本来の在り様をテーマとする、内なる変化。気づけば、(人間観における)面白さの質が変わる。心の嘘を普通としていた人は、それを隠せなくなる。

人の意識が、不思議と自分に集まるような状況が生じ、表情を辛くさせる人や焦った動きを見せる人が増える。眠気に抗えずに動きが止まったり、嫌悪の態度を取りつつ背を向けたりする人もいる。まるで挙動不審とも思える行動をする人や、すかさず距離を置こうとする人の姿に、思わず可笑しさを覚えてしまうこともある。

それらは皆、右に倣い、力に従うことで身を守り、隠し続けられた嘘が、脳を中心に在る本性の基を刺激されたことで、思い通りにはならなくなったため。多くの場合、頭の働きの鈍り、どうにもならなさを経験する。

5. 蛇絡みの価値概念の世界は、太陽の光を避けるようにして、非生命的な現実のその動きの無い原因を作り続ける。つまり、この国の大多数は、それ関わりの教えや風習を基とした生活空間を通して、信じ難い程の負の経験の蓄積を脳に染み込ませているということ。

それを考えれば、本心が変化を嫌う人たちのその体裁や建て前の内側で、想像以上の洗い直し(自浄作用)が為されるであろうことが分かる。その連なりが、他のそれと呼応するよう

にして引き起こす、時代の好転反応。そのことを把握し、自らの原因を変えていく。

この地上で生きる生命にとって、その原因が危うさ(狡さと欲深さ)でしかない、形式や権威と結び付く音楽は、心ある素朴な人の自然体で生きる力を奪う。無意識の意思(本性)がそうである人に守られるその世界では、太陽や月までが所有物のように扱われ、動きの無い異様な音で、生命世界の活力を抑え込む。その不気味さに何の違和感も覚えられない程脳をしつこく病まされた(上手く操られた)人たちの、その鈍った感性は、太陽の光の音の届く場所(次元)から動き出す。

6. 嘘の音楽は、文字通り、そこに本当の自分が居ない音楽。歌う時だけ特別になる、普通を置き忘れた不自然な歌。そして、独特の心情を作り出して聴く人をその気にさせる(感動に引き込む)、偽りの歌。

人の脳への影響を考えれば、嘘の音楽は、形(証拠)の無い犯罪と言える。その素質を持ち合わせる作詞・作曲家は、本性のままに嘘の歌を作り、人の世で、本当を力無いものにしていく。音楽を通して、変化しにくさが、そうとも分からずに安定していく。

その嘘の音楽は、それとはけた違いの狡猾さと残忍さを秘める別の嘘の音楽に支えられている。つまり、世の音楽の殆どは、その重量級の嘘の音楽の原因を様々に絡めつつ生み出されているということ。そうであるから、人は、音楽に親しむ分、

その気もなく、その隠された病み溜まりの世界に陥ることになる。

その恐ろしい醜悪な本性を原因とする音楽が、昔から尊いものとして受け継がれる、芸能絡みの音楽である。そこでの極上の嘘は、優雅さや厳かさを弄び、他を隔てる権威と独善の下支えをする。動きを無くし(抑え)、リズムを打ち消し、そして収縮と停滞を生み出して広がり(変化)を避けるそこでの音楽は、格式や威儀を基にその嘘を本当とし、人知れず、未熟さの現れでもある優越心や差別心の燃料でい続ける。それは、太陽の音楽からは最も遠い、生命世界の異物と言える。

7. 音楽の多くは、心ある普通の人の素朴な生き方をじゃまし、世の成長を阻もうとする人のためにある。その世界に関わる人は、そのために徒党を組み、したい放題人の心を弄ぶ。申し合わせたように同じ発想と行為を繰り返し、聴き手の人生を巻き込んで、彼らの変化を止める。世を憂い、はかなみ、それを変えて良くしようと、歌でポーズを取り、偽善を生きる。

その全ては、形無き怖れと嫉妬から始まり、人の世に不安の輪を繋ぐ。それらは皆、何の発展性も無い模倣の世界。真似に色を付け、嘘(時流)を包装し、そして好きなように作り出した歌を、お金に換える。この現代ほど、劣悪で中身の無い音楽がはびこる時は無い。

ただしかし、そうであるからこそ為し得る面白い体験がある。太陽の光の音が勢いよく流れ出せば、それは、世の音楽